

『方便より真実へ 浄土真宗』より抜粋

衆生本分の機と自力計度の機

36、第十八願がんにあいての相手あいての機きは、衆生本分しゅじょうほんぶんの機きですか、自力計度じりきけたくの機きですか。

解説かいせつⅡ第十八願がんに、十方衆生じつぽうしゅじょうを救うすくと呼びかけよてありますが、私わたしのどんな心こころを救済きゅうさいするので
す。心こころは一つしかないと思われおもましょうが、種々雑多しゅじゅぎったの心こころがありますが、どの機きを救うすくて
ださるのですか。衆生本分しゅじょうほんぶんの機きと申もうしますと、私わたしの本来持ほんらいもち合わせあわせの機き、宗教的しゅうきょうてきに照てらし出だ
された逆謗ぎやくぼうの機きを救うすくてくださるのですか。それとも、この人界にんかいに生うまれてきて、道徳的どうとくてきに
判断はんだんする計はからいの機きを救うすくてくださるのですか。どちらを救うすくてくださるのかと問とうている
のです。

人間にんげんは、みな二重人格者にじゅうじんかくしやだと思おもいます。自分一人じぶんひとりがいるときは、どんな行為こういでもする野生やせい

の心もおれば、人の前を繕うている見栄を張っている心もいるのです。

二つに分けてお話ししますと、上の心と下の心、感情と自性、番頭と主人、サルとウシ。上の心は、相手に調子を合わせている心、下の心は、自分ではどうすることもできない梃子に合わぬ心。自力で計ろうて合点する心、脈のあがっている屍。みなさん二つの心があることに気がつきませんか。私も初信の頃は説教を聞き、仏書を拝読さしていただけ、感涙に咽んで宿善の厚いことを悦び、これもご報謝ご報謝と、見るもの聞くものがありがたくて、いつとはなしに信後に入っているので喜んでいたのです。そのときは、信前信後の水際とか、真仮の分際とか、方便と真実の角目とか、難中の難とか、そんなものは微塵も気にかけたこともなければ、気にもかからないのです。助かっているのだから、死んだら極楽往生とばかり考えていたのです。これは自分の感情が、仏さまに調子を合して喜んでいるのですから、これを第二十願の信前の機というのですが、自分は金剛堅固の信心と思っているのですから、

自分にはわかりません。これを法頓根漸といいまして、助けてくださる名号法は、頓極頓速に五十二段を超証さす法ですけれども、それを眺めているだけで、法の尊さに調子を合わせているだけで、一体になっっていないから根は漸というのです。自分の根機はぐずぐずしていて、さっぱりしない。だから、この機を見てはいけないと包んで、法ばかりありがたがっているのだから、救われていないから贗物の信仰というのです。

自力計度の機といえますのは、自力とは、自力の修行をしている聖道門の人の心だけと思つたら大間違いですよ。信樂開発するまでは、みな自力があなたを導いてくれるのです。今度聞いたらわかるう、こんど聞いたらわかるう、と真剣になりつつある心が自分を引っ張って、他力の境地まで導いてくれるのです。

聞いても知つても覚えても、それは凡夫の智慧であつて、仏の世界に通用するものは微塵もなかったと望みの綱が切れたときが「いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定

住家ぞかし」で、自力の絆が切れるのですよ。あなたは、それを聖人さまにさして、自分
素直に話を聞いているのですから、演習と実戦の相違があるから晴れた天地に出られないの
ですよ。

これから先は読みなさんな、信仰が崩れたら、自分の信仰の幼稚な事に気がつかずに、そ
んなことがあるものかと謗法することになるから、お読みなさんな。どうなったのが他力の
信仰だろうか、どう聞いたら開発するのだろうかと思う心が自力であり、計らいであるか
ら、その計らいを計度というのです。あなたが素直な真似をして、信仰をいたただこうと仏さ
まに調子を合わせているのですから、第二十願の法が他力で機が自力の心というのです。

仏さまのねらい、第十八願のねらいは、あなたの秘密の部屋に隠れている仏とも法とも考
えない衆生本分の機の逆謗の屍と一体になろうと十劫已来立ちづめですよ。

法は完全無欠で、尊い法だとあなたに讃めてもらいたいために立つておられるのではありません。あなたの一番嫌っておられる逆謗の屍と一体になろうと立ちづめで狙うておいでになるのですから、あなたと仏さまとは真反対の信仰です。

上の心の感情のサルが仏さまに調子を合わせていたただこう、いたただこうとあせればあせるほど、動かぬ闡提の機が見えてくるのです。それが調熟の光明、果遂の誓いの願功です。

真剣になればなるほど、必死になればなるほど、仏さまに遠ざかり切ったときが、匙を投じたときが、自力がつきて他力不思議に生かされたときです。極悪最下の機類が極善最上の法に摂取されたというのです。捨自歸他、機無円成は同時であって、仏凡が一体になり、

これを平生業成、即得往生 住不退転、現生不退、摂取不捨というのです。だから身体が死んでから助かるのではありません、自力の心が死んだとき、他力不思議に生かされたときなのです。仏さまは、あなたのありがたがる感情を救うのではなく、あなたのありがたがらな

い衆生しゆじやうほんぶん本分のき機ぎやくほうの逆謗しかばねの屍いったいと一体いったいになろうと狙ねらうておいでになるのです。

179、法席ほうせきに出たでとき、僧侶そうりよも俗人ぞくじんも猫ねこをかぶつて有難ありがたそうにしているだけで、家いえに帰かえれば地金じがねが出るでのは、信仰しんこうの贗物にせものではありませんか。

解説かいせつⅡ人間にんげんは誰だれでも二重人格にじゆうじんかくで、他人ひとの前まえに出たでときは、立派りつぱな人格者じんかくしゃのように見みえますけれども、裏うらにまわれなば何おもを思おもっているか、何なにを考かんがえているかわかりません。法席ほうせきに出たでときは、僧侶そうりよも俗人ぞくじんも、みな猫ねこをかぶつて体裁ていさいを繕つくろうていますが、その心こころで合点がってんをし、有難ありがたがつているのは、みな贗坊主にせぼうず、贗同行にせどうぎやうです。嘘坊主うそぼうず、嘘同行うそどうぎやうというのではありません。第十八願だいじゅうはちがんの如実ほんとうの信しんをいたひとだいていた人ひとに、贗にせているだけです。本物ほんもの、真物まものがいないのですから、人間同士にんげんどうしでは通用つうようしますけれども、開発かいほつした仏智ぶつちを諦得たいとくした人ひとから見れば、尻尾しつぽがよく見みえ

るのです。法席ほうせきで有難ありがたがつているのは、自力計度じりきけたくの機きで、これを感情かんじょうといい、猿さるといい、番頭ばんとうというのです。この心こころが表おもてに出て、闇取引やみとりひきをして、有難ありがたがつているのですが、家いえに帰かえると衆生本分しゅじょうほんぶんの機き、これを自性じしやうといい、牛うしといい、主人しゅじんというのです。表おもてでは、ハイハイ承知しやうちしましたと笑顔えがおをして、番頭ばんとうが商売しやうばいをしています、裏うらにまわれば主人しゅじんが、それは承知しやうちできないと頑張がんばって、話はなしを崩くずす奴やつがおります。

みなさん方は招かまねざる客きやくが来たきとき、口くちではよく来きてくださったと挨拶あいさつはしているが、心こころの中ではどんなに思おもったか、経験けいけんしたことはありませんか。心口各異しんくかくいの挨拶あいさつをしているのでしようが。法席ほうせきに出でたときは有難ありがたがつて称名しょうみやうしているが、法席ほうせきを離はなれたら地金じがねが出でませんか。三不三信さんぶさんしんはそれが書かいてあるのですよ。

衆生本分しゅじょうほんぶんの機きの地金じがねの特牛牛こつというしを心こころの秘密ひみつの部屋へやに寝ねかしておいて、自力計度じりきけたくの計はからいの猿さるが、お慈悲じひをいただこうと手てを拡ひろげているところへ、坊ぼうさんが声こえや節ふしでだまして、その身みそ

のままその機きのなりで、悪い心わるいこころを直なおせでないぞ、曲まがった根性こんじょうを正ただせでないぞ、やりたい放題ほうだいやりつらせ、飲のみたい放題ほうだい飲あるみ歩あるけ、あとを受け持もつ親おやじゃぞよう、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、ええ親おやじゃのう。ずぼらをこいてお浄土じょうどに暴れ込こむのを他力たうきのように心得こころえてゐるサルが、話はなしに調子ちようしを合あわして喜よろこんでいるが、それでよいかと念ねんを押おすと、下したからモーンと特牛牛こつとうしが角つのを出だすと信仰しんこうは直すぐに崩くずれてしまい、お寺てらではあんなに涙なみだを流ながして喜よろこんでいたのに、どこで逃にげたか、消きえたか、さっぱりわからない。三十年ねんも四十年ねんも同じおなじことを繰くり返かえして櫓ろを漕こいでいますが、艦綱ともづなが解といてないから、舟ふねは動うごいても、目的もくてきの島しまに渡わたれないのです。

如何いかがですか、ありがたい話はなしを喜よろこぶのではありませんよ、ありがたい身みにさしていただくのですよ。逆謗ぎやくほうの地金じがねが名号みょうごうと一体いったいになるのが二種深心にしゆじんしんですよ、二種深心にしゆじんしんのお言葉ことばの真似まねをして、死後しごを楽たのしんでいるのは、みな贗物にせものですから、平生業成へいぜいごうじようも確立かくりつしていませんが、真実報土しんじつほうど

には絶対^{ぜったい}に往生^{おうじょう}はできません。

あなたの本性^{ほんしやう}が照^てらし出^だされていないのですから、救^{すく}われてはいないのです。救^{すく}われたつもりで頭^{あたま}を隠^{かく}して尻隠^{しりかく}さずで、法^{ほう}を見^みれば参^{まい}れそうなが、機^きを見^みれば墮^おちそうなのです。実地^{じつち}の求道^{きゅうどう}をした後^{のち}、二種^{にしゆ}深心^{じんしん}が徹^{てつ}底^{てい}したら、真^{しん}仮^げの分際^{ぶんざい}が明瞭^{めいりやう}になります。そのとき初^{はじ}めて、贗^{にせもの}物^{もの}から真^{ほんもの}物^{もの}になるのです。